

博士學位論文

内容の要旨
と
審査結果の要旨

2014

国際基督教大学

氏名	大野 ロベルト
学位の種類	博士 (学術)
学位記番号	甲 第 185 号
学位授与年月日	2014年6月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	紀貫之の影 -日本文学と文化の根本を探る- (In the Shadows of Ki no Tsurayuki : Exploring the Foundations of Japanese Literature and Culture)
論文審査委員	主 査 教 授 ツベタナ I. クリステワ 副 査 特任教授 大 西 直 樹 副 査 教 授 小 島 康 敬

論文内容の要旨

本論文は、日本文化史における紀貫之（八七一～九四六）の役割について、古代日本における和歌の機能の再解釈を通して、考え直す試みである。

紀貫之は、高い知名度を誇る文学者ではあるが、主として日記文学の嚆矢である『土佐日記』の作者として知られており、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の中心的な撰者であったことや、その結果として生涯を通じて第一線の歌人であり続けたことは、十分に評価されているとは言い切れない。

現代は詩歌が社会的活動の周縁に位置づけられているが、古代日本においては、とりわけ日本文化の独自の姿を築き上げてきた平安時代においては、和歌が一般的コミュニケーションの手段だった。さらに、知的活動の中心をなして、哲学的議論のメディアとして機能していた。だから、歌学書が日本最古の哲学書である一方、勅撰集をはじめ和歌集もまた、メタ詩的レベルでは、プラトンの対話篇のように、哲学的議論として読める。こうしたアプローチを最初に提出し根拠づけたのは『涙の詩学 - 王朝文化の詩的言語』（2001年）などの先行研究だが、本論文の貢献は、このような視点に立脚して、紀貫之の歌人としての活動を徹底的に追究し、古代日本を代表する哲学者としての役割を明確にしたことにある。

序章では、紀貫之に関する先行研究を踏まえながら、本論の目的と研究方法について紹介している。

第一章では、貫之の生涯と、文学を中心に据えた時代背景をたどり、和歌の「共同体」の問題を取り上げている。なかでも特に興味深く思えるのは、「亭子院歌合」の分析を基にして行われた和歌の社会的な位置づけの考察である。

第二章では、歌学者としての貫之に焦点を当て、『古今集』の「仮名序」を中心に、その活動を分析している。歌学書のモデルとなった「仮名序」のなかでは、貫之が「やまと歌」や「言の葉」といった新しい概念を駆使しながら、漢文の伝統的な枠組をうまく利用して、和歌のための理論を構築しようとしたという主張から始まり、貫之の思想が『新古今和歌集』に至るまでの後世の勅撰集に付せられた序文にどのように反映されたかについて考察している。さらに、「大堰川行幸和歌序」と「新撰和歌序」という貫之が書いたもう二つの序文についても取り上げ、彼の和歌観を纏めている。最後には、晩年作の「新撰和歌序」が漢文で書かれたことを取り上げ、その意味について考察している。

第三章では、『古今和歌集』の歌の分析を行っている。和歌集における歌の配列や詞書の働きなどの問題を踏まえて、メタ詩的レベルでの読みについて紹介したうえで、いくつかの歌群の連続的な読みを試みている。さらに、「霞」「雪」「月」「花」「風」「水」など、貫之が好んで詠んだ主題について考察し、貫之の表現の特徴を分析し、詩的カノン作りの初期過程における彼の役割について論じている。

第四章では、第二と第三の勅撰集である『後撰和歌集』と『拾遺和歌集』を取り上げている。貫之の死後に集成されたこれら二つの和歌集は、『古今集』とともに「三代集」と呼ばれていて、詩的カノン作りの過程を完成させたものとされている。よって、これら二つの勅撰集のなかで、貫之の和歌に対する姿勢を考察することには、次世代にどのように受け継がれたかについて確認できるという意味がある。本論文は、『後撰集』は貫之を歴史化する傾向があるのに対し、『拾遺集』は貫之を権威化する傾向がある、という結論に至っている。最後には、同時代の重要な私撰集である『古今和歌六帖』をも踏まえて、詩的カノン作りの過程における貫之の役割について纏めている。

第五章では、『土佐日記』と『貫之集』を分析している。まず『土佐日記』は、日記や紀行文のみならず、さらに歌論書としても読めるという可能性について追究している。『土佐日記』が仮名で書かれたことには、和歌を考察の対象にしたという理由もあり、その試みを通して醸成された仮名の表現力は、その後の日本語のあり方にも大きな影響を及ぼした、という主張である。一方、『貫之集』は、九百首からなる貫之の私家集ではあるが、彼の没後に、他者によって編まれたものと考えられているので、『土佐日記』以上に、生身の人間としての貫之の姿を描き出しているといえる。まとめて言えば、貫之本人によって書かれた『土佐日記』と彼の没後に編まれた『貫之集』を比較することで、貫之の思想とその受容の問題に加えて、テキストから透けて見える貫之の実像にも

焦点を当てることができたのである。

終章では、「光」でも「陰」でもあり、さらに「面影」をも喚起する「影」という歌ことばの連想のネットワークに添って、没後から現代にいたるまでの貫之の受容と評価の歴史をたどっている。そして、「やまと言葉」の潜在力を徹底的に発展させ、メディアとしての「和歌」の機能を全面的に発揮させるという時代の先端を行った貫之が、当時の和歌だけでなく、日本文化や日本語の発展に与えた影響について纏めている。

論文審査結果の要旨

2014年5月23日、ツベタナ I. クリステワ、小島康敬、大西直樹の各教授からなる博士論文審査委員会の審査が開かれた。審査では、冒頭に大野ロベルト氏から論文について概要的な説明が行われた後、審査委員会から個別に質疑応答が行われた。

2014年1月20日に行われた中間発表審査では、大野氏の論文改善のために次の三つの課題が挙げられた。すなわち、論文の焦点がいつそう明確になるため、各章の構造を再考察し、焦点からはみだす説明を省略するか、注のなかに入れることや、自分の貢献をいつそう強調するため、先行研究(特に、指導教官の研究)についてもっと詳しく紹介することや、詩的カノン定着における貫之の役割をいつそう根本的に示すため、『古今和歌六帖』も取り上げること、という三つである。最終的に提出された博士論文にはこれらの点が改善されていた。特に、極めて長かった論文の構造を考え直し、焦点を見極めた結果、論文の大きな貢献がいつそう明確になったということは、審査員全員によって高く評価された。

大西直樹教授は、論文が改善されたことを確認し、結果としてその主張が和歌に詳しくない読者にも伝わるようになってきたと指摘した。さらに、論文のなかで特に興味深く思えるのは、思想家としての貫之についての分析であると評価しながら、「思想家」と「哲学者」の使い分けについて訊ねて、貫之は「哲学者」と呼ぶうるかについて質問した。それに対して、大野氏は、“philosophy”は、古代ギリシャ語に由来しながらも、現在、一般的な用語として広く使われていることを踏まえて、知の形態は文化や時代によって異なる、という論文のアプローチについて説明した。

小島康敬教授は、知の形態に関する大野氏の説明を支持し、本論文のなかでは、貫之を哲学者として取り扱う根拠が十分に挙げられていると指摘した。だから、大野氏が試みた考察は、思想史の視点からも高く評価できると説明した。さらに、中間発表の段階で指導教官の「影」があまりにも強く感じられたことに比べると、今回は、大野氏自信の「声」がもっとはっきりと聞こえてきたので、論文の貢献も明確になってきたことについて確認した一方、こうした「依存」を完全に無くすために、具体的なアドバイスもした。

ツベタナ クリステワ教授は、論文が改善されたことを強調し、構造の考え直しの結果として、焦点が明確になってきたことを指摘した。さらに、大野氏の分析力を評価し、特に『古今集』の歌群の解釈のレベルの高さに着目した。一方、現段階で訂正すべきいくつかの点、すなわち先行研究の紹介、用語の使用、詞書に関して

の分析、他人による歌の解釈と自分の解釈との区別などについて指示したとともに、出版に向けて改善すべきことについても指摘した。

審査とは無関係だが、口述試問が一般公開だったので、例外として、オーディエンスからも質問を受け付けることにした。そこで、なぜ紀貫之を研究テーマに選んだかという質問に対して、大野氏は丁寧に答え、修士論文で『無名草子』を取り上げてから博士論文に至るまでの経緯について紹介したので、貫之研究に対しての熱心な態度について再確認できたのである。

以上、様々な問題点や改善ポイントが挙げられたが、審査委員会は大野ロベルト氏の研究が博士論文として高いレベルのものに達しており、紀貫之の研究に大きく貢献するものであるという結論に達した。

審査委員会は、2014年5月23日16時50分から18時40分まで、国際基督教大学教育研究棟247号室で最終口述試問を実施し、引き続き審査委員が最終判定を行った。その結果、委員全員の一致を得て、本論文が博士の学位を授与するに値するものと認めた。